

思春期の衝動分析

—特に中学生の Szondi Test 反応を中心に—

奥野哲也

[抄録]

Szondi Test を活用しての非行少年を対象とした研究は多くあるが、非行のない思春期の人に対する調査研究は多くない。そこで今回は一般の中学生に対する研究を行った。その結果、中学生の心的衝動は、「依存的で甘えっ子な面を持っていて、対人接触は柔和で温かく、受動的で、積極性には欠ける傾向が見られる。そして自己の意思表示には抑制的で、むしろ周囲に迎合的で、大人しい態度でいる」という傾向を持っていることが明らかになっている。また男女別での検討では、「女子中学生は男子よりも、情愛欲求が満たされており、顕示的で、幼稚さを伴った顕示的行動をとり易く、精神的充足感もあるが、主体性は乏しい。そして移り気で新たな流行を求めて積極的に行動する傾向が目立っている」、一方男子中学生は、情愛欲求が満たされず、不満があっても顕示的な行動は控え目である。また自己中心的であり、対人関係では孤立しやすく不安に駆られて葛藤しやすい面があり、気分転換が女子よりも図りにくい面がある」といった傾向が明らかになっている。続いて中学男子少年と非行男子少年とも比較検討をおこなった。非行男子少年は、「中学生男子少年より積極的であるが、反社会的で攻撃的である。自己中心的であり、思いとおりにならないと些細な事に拘泥して、やる気を失くしやすい」といった傾向が認められる。

キーワード：中学生調査、思春期の衝動、Szondi Test、男女別比較、非行群比較

研究の目的

1 思春期は、「研究者によって年齢区分は若干異なるが、狭義には12～14歳、広義には12～17歳くらいを指す」とされている。もともとは「第二次性徴の出現を中心とする生物学的区分であるが、最近では社会的な区分に重きをおき、中学生以降大学生くらいまでを含めて“青年期”として扱うことが一般的である」⁽¹⁾とされている。

思春期は成人期の前期部分にあたり成長に向かう波乱の時期でもあり、よく「嵐の時代」、或いは「疾風怒涛の時代」と称されている。この時期は、その後の人生の主要な方向付けを

決定する要素が多く絡まっており、大変重要な時期であることは言を俟たない。身体的にも、心理的にも、社会的にも、大きな変化が出てくる時期である。これまでは誕生からずっと、親の加護のもとで成長してきたが、次の成長に向けて新たなステップを踏み出す時期であることから、「第二の誕生」とも言われたりする。つまり「第二の誕生」と称せられるほどに、いろいろな困難さをはらんでいる、いわば大変な時期でもある。つまり性的ホルモンの増加をはじめとして身体的なバランスも欠きやすく、極めて微妙な状況の中で崩れやすい状況にある。また精神的にも既成の世界観から、自己の心理的成立基盤を求めての自立を控えての、反抗と混乱の時期でもある。

したがってこの時期には、身体的様相を呈した疾患のみならず、反抗・混乱からの精神的様相を呈した疾患なども出現しやすく、人生にとって非常に重要な意味を孕んだ「危機的時期」であるとも言える。

一方親の暖かい抱擁や加護という側面だけではなく、その否定的要素に激しく感応してしまう場合もある。そのように、ある意味では自己を縛りつけ、支配や影響を受けてき大人社会の権威や既成概念からの否定的出立の道程で、反発や厳しい批判、反抗といった側面から法的逸脱行動に走ってしまう危機的状況が生じることもある。すなわち犯罪や非行がそうである。とりわけこの時期から反社会的行動が繰り返され、その結果、成人になってからも常習的に犯罪行動を重ねたり、反社会的価値観を身につけてしまうこともあるなど、思春期の重要性については、人間のどのような時期よりも、この時期が保有する重厚な要素は、他の時期には代え難い時期であると言える。

2 こうした波乱に満ちた思春期に生きる児童生徒を中心に、その衝動がどのようなものであるのかについて明らかにしてゆきたい。この研究の基礎になっているのは、過去に非行少年や虐待児童の衝動分析の研究を行い、それぞれの衝動の在り方について比較検討しながら明らかにしたが、その研究では Szondi Test を中心的に用いた。そのことによってより容易にそれら対象の心的状況を明らかにすることが可能となった。今回も Szondi Test という、“人物顔写真の好き嫌い”について相対的比較選択を行う技法を使うことにした。それは以前の研究同様に、Szondi Test が「好き嫌い」の選択といった、言語を用いないで施行する手法で、無意識的なレベルでの心情などが抽出される心理査定技法である点に着目した。つまり心理査定技法における、より基本的で、基礎的な手法をもちいる、この手法は、思春期の複雑な状況に生きる児童生徒の、より直接的な心情把握が他の技法によるよりも可能になるのではないかと期待されるためである。上記1)に既述したように、生理学的・身体的或いは精神的変化が激しい年代の思春期の反応を、心理的防衛から生じる心的反応歪曲をなるべく少ない状況下で捉えることが、必要でもあり重要と判断したことによる。手軽に、集団法として実施でき、しかも被験者自身が興味や関心を持ち、心理的侵襲といったマイナス要素が生じない

投映法の心裡査定技法としては Szondi Test が最も有効なものと考えられる。

研究 1 一般中学生を対象とした調査

1 非行のない12歳から13歳(中学1年生)138名に、L.Szondiの原法(スライド投射)ではない改良版集団法 Szondi Test (図版を各組6頁のグラビア印刷冊子にして各被験者に配布する方法)を実施した。施行法は138名全体の一斉実施ではなく、30名を少し超える程度の比較的小さな集団を4組(学級クラス単位)にして実施している。実施時間は各組とも、説明も加えて約15分程度で実施を終えている。小集団に丁寧に説明して実施したつもりであるが、138名の内14名に記入の誤りがあり、反応プロフィールが全て作成できなかった。この調査報告では Szondi Test 実施で得られる前景像及び理論的背景像、背景像の3反応の内、前景像のみを対象にして統計処理を行ったので、施行誤りのあった14名全てが、この3反応作成が不可能という訳ではなく、一部(主に前景像)の反応は得られる状態であったが、慎重を期して調査対象から外し、今回は124名(男子65名、女子59名)を対象として研究を進めた。

2 次の①②を各自に配布して実施した。

①正規の Szondi Test 図版に代わる、全部で6頁からなる「好嫌写真帳」(グラビア印刷された第1組から第6組までの Szondi Test 図版)

②施行方法 - 改良型集団法での実施

施行に際しての教示は、改良型集団法 Szondi Test にしたがって実施した。

過去に集団法による調査研究⁽²⁾は、多くの被験者を対象にして調査をする手法として考案された。それは、暗くした部屋でスクリーンに1組8枚からなるスライドを、1組ずつ6枚スライドにしたものを次々と投影して、被験者に好き嫌いを選択させ、一度に多くの被験者の反応を得る手法である。今回用いたのは、この方法ではなく M.Webb (1959) が、H.Dreyer の行った研究として紹介した技法である。その後この技法は、矯正施設での独自の心理査定法の開発を旨とした法務省の意向を背景にして、L.Szondi の許に留学した佐竹隆三が日本に Szondi Test を本格的に導入した。法務省は、収容者向けの心理検査法を必要としていたこともあり、Szondi Test を少年鑑別所の鑑別業務や刑務所の分類調査業務に大々的に取り入れ紹介し、Szondi Test 図版や解説書を全国の矯正施設に配布して実施・活用を促している。それに応じて佐竹は、スライドで実施する方法を改善して、投射するスライドではなく、冊子にスライドを印刷した6頁からなる写真帳を作っている。この写真帳は実施予定の人数分準備して集団方式でも、また個別に実施する場合にも、この写真帳を使って、矯正施設で実施するようになっている。そして、その後転出した大正大学での心理相談においても、この

方法で行っている。L.Szondi が最初に考案した方法に比べて、被験者の手元に選択する顔写真があるという、被験者とテスト媒体が近い（L.Szondi が考案した手法は、スクリーンと被験者までの距離が遠い）ことから、正規の個別法と、あまり変わらない感触での実施が可能であると考えられた。

またこの方法の最大の利点は、被験者に一度に素早く、1組8枚の、全体の写真配置を瞬時に示すことが可能などところにある。正規のバラバラな写真カードでは、いくら手早く並べても一度に全体を示すことが出来ない。一度に全体8枚の写真が並ばないと好き嫌いという、見た目の印象の比較検討からの選択を求めるだけに、全体の提示に時間差による好き嫌いの印象、特に比較検討に支障が生じる危険性もゼロではない。特に初心者には、8枚の写真カードを流れるように写真提示するには、別の練習や技術が必要になる。時には写真提示位置に誤りがあることも起こる。この点を解消するのが、1組8枚の写真を1枚の頁に印刷した写真帳である。

著者は、佐竹が用いたこの方法を更に正規の個別法の写真カードに、見た目が近いようなグラビア写真用紙に、1組8枚の写真カードを8枚印刷して、改良型の集団法として用いて、正規個別法と集団法使用の場合の Szondi Test 反応の相関を求めて研究を行い、その妥当性について検討した結果を発表⁽³⁾⁽⁴⁾している。このグラビア写真帳使用のものを改良型集団法と名づけて、今回は実験的に用いることにした。但し正規の個別法の技法と変わらない調査を念頭に実施し、結果の整理に当たっては、残り4枚から作成される背景像 EKP については調査対象外とし、正規法に最も近い選択行為により作成される前景像 VGP のみを、今回は調査対象にした。より正規法に近い反応のみを調査対象としようとしたものである。

3 Szondi Test 集団技法のテスト学的な妥当性は、これまでの行われてきたいくつかの研究では信頼性の高いものであることは確かめられている。M.Webb も、L.Szondi との共著の「The Szondi Test」(1959)において、信頼性が高い技法であることをはっきりと記載している。したがって今回のような多くの人数を対象とする調査研究での活用法としては、当然意義あるものであるが、個々の人を対象とする臨床面接・診断においては、あくまで本来の48枚の写真カードの個別技法を用いるのが正規な方法であることは言を俟たない。また、1組8枚の人物写真提示により、「好き2枚、嫌い2枚」の計4枚を選択を通して得られる、いわゆる前景像プロフィールのみを、今回は調査対象にしている。

4 調査の教示は次のとおりである。「この調査は、どれを選んだから間違っているとか合っているということはありません。自分の思ったとおりに選んでください。周りの人を見たりしないで、自分の思ったとおりに記入してください。見た印象だけで、なるべく早く選んでください。」

「写真帳の第1頁を開けて、8人の顔写真のうち、一番嫌いと思う人を2人選んで、記入用紙の第1頁の該当箇所に×印を2か所つけてください。あくまで見た感じの印象で、なるべくさっと選んで、記入してください。

次に好きと思う人を8人の中から選んで、2か所に○印を付けてください。その次は残りの4人の中から、残った中で嫌いだと思う人を2人選んで、斜めの棒線(斜線)を2か所に引いてください。2枚ずつ選択をします。1人しかいないと思っても2人探して決めてください。また3人以上いる場合でも2人に決めて選んでもらいます。

もう一度言いますと、まず嫌いな人を2枚を決めて、用紙の該当する位置に×印2か所をつけます。次に好きな人2枚を決めて、用紙の該当する位置に○印2か所をつけます。それから、残った4枚の顔写真の中から、また嫌いと思う人を2人決めて、用紙の該当位置に斜めの棒線を2か所につけてください。何もつけない人が2人残りますが、そのままにして、次の頁に移って、先ほどと同じように、嫌いな人2人の×印から始めてください。

嫌い2枚、好き2枚、残りの嫌いが2枚です。この様にして最後の6頁まで進んでください。」

調査結果—各因子反応の出現頻度状況

①h因子の反応出現頻度は、表1のとおりである。 χ^2 検定の結果は、0.1%水準で有意となっている。h因子ではh+反応が最も多く、次いでh0反応、h-反応となり、h±反応が最も少ない結果となった。

表1) h因子反応出現頻度表

+	-	0	±	合計
70 (56.5)	16 (12.9)	29 (23.4)	9 (7.3)	124 (100%)

$\chi^2=100.9$ P<.001 df=3

②またs因子の反応出現頻度は、表2のとおりである。 χ^2 検定の結果は、0.1%水準で有意となっている。つまりs因子ではs-反応が最も多く、次いでs±反応が続き、s+反応は少なく、さらにs0反応が最も少ない反応型であることを意味している。

表2) s因子反応出現頻度表

+	-	0	±	合計
9 (7.3)	84 (67.7)	6 (4.8)	25 (20.2)	124 (100%)

$\chi^2=169.7$ P<.001 df=3

③e因子の反応出現頻度は、表3のとおりである。 χ^2 検定の結果では0.1%水準で有意となっている。つまりe因子では、e-反応の出現頻度が最も多く、次いでe0反応であり、続

いて e + 反応が比較的近値で続いている。最後に e ± 反応を示している。これらの結果から e 因子では、e + 反応と e0 反応が共に近い数値で接近しており、h 因子や s 因子の出現状況とは異なることを意味している。

表 3) e 因子反応出現頻度表

+	-	0	±	合計
26 (21.0)	44 (35.5)	32 (25.8)	22 (17.7)	124 (100%)

$\chi^2=22.56$ P<.001 df=3

④ hy 因子の反応出現頻度は、表 4 のとおりである。 χ^2 検定の結果では 0.1% 水準で有意となっている。表 4 で明らかなように hy 因子では、hy0 反応が最も多く、hy - 反応、hy + 反応と続き、hy ± 反応が最も少ない結果となっている。

表 4) hy 因子反応出現頻度表

+	-	0	±	合計
31 (25.0)	37 (29.8)	42 (33.9)	14 (11.3)	124 (100%)

$\chi^2=29.36$ P<.001 df=3

⑤ k 因子の反応出現頻度は、表 5 のとおりである。他と同様に χ^2 検定では 0.1% 水準で有意となっている。k - 因子が最も多く多発し、k ±、k0 と続いて、k + 反応が最も少ない結果となっている。

表 5) k 因子反応出現頻度表

+	-	0	±	合計
10 (8.1)	64 (51.6)	24 (19.4)	26 (21.0)	124 (100%)

$\chi^2=75.68$ P<.001 df=3

⑥ p 因子の反応出現頻度は、表 6 のとおりである。 χ^2 検定では 0.1% 水準で有意となっている。そして結果では、p + 反応が 60% を示すなど最も多く。次いで p0 反応が多く出現している。p - 反応は多くなく、p ± 反応が最も少ない結果となっている。

表 6) p 因子反応出現頻度表

+	-	0	±	合計
75 (60.5)	16 (12.9)	26 (21.0)	7 (5.6)	124 (100%)

$\chi^2=122.0$ P<.001 df=3

⑦ d 因子の出現頻度は、表 7 のとおりである。 χ^2 検定では 0.1% 水準で有意となっている。結果では、d0 反応が最も多く出現している。そして次いで d + 反応であり、続いて d - 反応となっている。d ± は最も少ない結果となっている。

表 7) d 因子反応出現頻度表

+	-	0	±	合計
32 (25.8)	22 (17.7)	65 (52.4)	5 (4.0)	124 (100%)

$\chi^2=88.08$ P<.001 df=3

⑧ m 因子の出現頻度は、表 8 のとおりである。 χ^2 検定では 0.1% 水準で有意となっている。結果では m + 反応が最も多く、次に m - 反応が出現し、次いで m ± 反応、最も少ないのが m0 反応となっている。

表 8) m 因子反応出現頻度表

+	-	0	±	合計
62 (50.0)	25 (20.2)	17 (13.7)	20 (16.1)	124 (100%)

$\chi^2=64.08$ P<.001 df=3

結果の考察

まず h 因子では、h + 反応が多発 (56.5%) している。Szondi 理論で h 因子は、「母性的欲求(エロス)」を示す衝動である (奥野 2004)。つまり h 因子という対人領域の衝動が、暖かい (h +) 対人接触対応をしていることを意味している。L.Szondi (1960) によれば、h + を「正常な愛及び結合の状態を示す」としている。また大塚 (1974) は、「エロス欲求、個人的情愛欲求、女性性、受動性、軟らかい傾向、平凡性、単純性、感傷性」としている。臨床的にも人との暖かい関係を望み、穏やかな態度で人と向き合える能力を持っていることを意味している。

また最も出現率が低かったのは、h ± 反応 (7.3%) である。h ± 反応は、対人接触がアンビバレント、つまり両極性を意味し、否定・肯定が相半ばしていることを示している。つまり対人状況における情愛の葛藤を示唆している反応である。中学生にはこうした情動が最も少なく、暖かい対人接触を求める情動 (h +) が多いことを意味している。

s 因子は、父性的欲求 (タナトス) を示す衝動因子である。この出現頻度結果からは、s - が最も多いことを示している。これは、「受動性、消極性、自己犠牲的」を意味している。また最も出現頻度が少ないのは、s0 反応で、「攻撃欲求の解放、無気力、活動力低下」を意味している。つまりこの結果からは、中学生は、受動的、消極的であり、攻撃性は低いことを示しているといえる。

次に e 因子は、感情発作ベクター (P ベクター) のうちの倫理的衝動を意味している。最も出現頻度が多いのは e - 反応で、これは、「カイン (悪) 欲求、憎悪、猜疑心、不安」を示す。一方最も少ない出現率であるのは e0 反応で、これは、「カイン欲求の解放、激情衝動の解放、強い感情解放後の放心状態」などを示しており、中学生には、「周囲への憎悪や猜疑心からの

不安感情」が生じやすいことを示している。またこうした周囲への悪的衝動が生じても、解放や発散といったことは少ないことを示している。いずれにせよ、次の hy 因子の出現頻度の結果であるが、感情発作ベクターを形成する二つの因子は、いずれも最高値でも 30% 台であり、他の 3 つの反応型との出現頻度差は高くないことを示している。即ち e 因子と hy 因子を除く、他の 6 つの因子は、いずれも最高出現頻度を示す数値は 50% を超えているにもかかわらず、この 2 因子は出現頻度の状況が、明らかに他とは異なっているのである。また最低値もほとんどが一桁台の数値であるが、e 因子・hy 因子では二桁台（他には m 因子最低値も二桁台である）を示している。因子内の 4 反応が、有意差はあるが χ^2 値が他に比べると低く、ともに出現頻度の差が大きくないのである。これが何を意味するのかについて明確に指摘することは難しいが、e 因子と hy 因子に関しての中学生の反応は、どの反応が多く出現してもおかしくない訳であり、それだけに感情面での衝動形態は安定的ではないと言えるのかもしれない。

それを傍証するように道徳的要素を示す衝動である hy 因子での最高頻度反応は、hy0 反応で、これは、幼稚で粗雑な感情表出的傾向が示されやすいことを示している。また最低値は、hy ± 反応である。これは感情表出における葛藤や懐疑的衝動があることを意味し、安定性の乏しい衝動に支配されやすいことを示している。こうした状態の衝動形態が選ばれることが少ないことを示している。

次に k 因子は、所有欲求を象徴する衝動である。また同時に p 因子と共に自我衝動を形成しており、対人関係の在り方が反映される因子でもある。今回 k - 反応が多発（51.6%）している。k - 反応は自我の内に価値づけられたものを抑制・抑圧して、対人状況では、自我を抑制して、周囲との適応的な状態を促す作用を持つ反応である。したがって中学生の適応的、迎合的な状態が生じやすいことを示していると判断される。また最も出現頻度が少ないのは、k +（8.1%）であり、自己の思考の在り方や理屈にこだわって、周囲から孤立し、利己的状況に籠る反応である。周囲には冷淡で無愛想に映ることが多い反応型であるが、今回はこうした周囲との不協和的態度の反応は、最も少ないことを示している。

p 因子は、存在欲求を意味する因子で、4 ベクター中の「中核の中心的因子」とも言えるものである。ここでは p + 反応が最も多く（60.5%）出現しており、はっきりした強い意志力の出現は熱意や信念をしっかりと持って、周囲と対峙できている者が大半を占めていることが分かる。一方 p ± 反応が最も少ない。（5.6%）、これは対人場面で孤立的状況を生じて動揺を来している反応であるが、こうした傾向は少ないことを示している。

d 因子は、探求の衝動である。また関心領域の方向性や対人関係の方向性を担っている衝動である。この因子では d0 反応が最も多く（52.4%）出現している。d0 反応は、現在の関心領域に現段階では、ある程度満足していて新たな対象に関心が向かないことを反映している。中学生は、こうした面では興味や関心が飽和的状況下にあることを意味し、消極的構えがあ

ることを示唆している。また $d \pm$ 反応が最も出現が少ない(4.0%)ことを示していることから、興味・関心が定まらないとか、探求や執着についての方向が定まらないというような状況にはないことを意味していると考えられる。

m 因子は、依存と固着の衝動である。この因子では、 $m +$ 反応が最も多く出現 (50.0%) している。周囲、特に母性への依存的構えを示す者が多いことを示している。また $m0$ 反応が最も出現率が低く (13.7%)、対人関係における情緒的な無関心さといった側面は低いことや、依存欲求が充足して満たされているというような状況が少ないことを反映していると考えられる。

こうした因子の反応出現頻度のまとめから、中学生の心的状況については次のようなことが言えるのではないかと考えられる。

①母性的情愛欲求を求める傾向 ($h +$) があり、母性への依存的固着 ($m +$) が目立っている。また温かい対人接触を保とうとする心情が一般的である。

②攻撃性や積極的態度は少なく ($s +$ は4反応中第3位で、しかも第4位から2.5ポイントしか差が無いほど低値)、消極的で受動的態度 ($s -$) が一般的である。

③しかしそのような依存的状況であるにもかかわらず、周囲への不満や猜疑の構えを示す者が多く、そのために不安が生じやすい状況 ($e -$) にある者が一般的である。しかもそうした心情が表出 ($hy0$) しやすい傾向にあることを意味している。

④一方こうした状況の中で、自己の意思や考えを持っている ($p +$) が、それを主張することはなく、むしろ周囲に合わせて適応しようとする ($k -$) 構えを示す者が多い傾向にある。

要するにこうした結果を要約すると中学生の心的衝動は、「依存的で甘えっ子な面を持っていて、対人接触は柔和で温かく、受動的で、積極性には欠ける傾向が見られる。そして自己の意思表出には抑制的で、むしろ周囲に迎合的で、大人しい態度でいる」というような衝動傾向を持っていることが、因子出現頻度から明らかになっている。

研究2 一般中学生の男女比較調査

成人の男性であれ女性であれ、男性は男性なりの女性は女性なりの生き方があり、様々な社会生活面での相違がある。特に思春期の性の違いは、人格面や行動面に相当大きな違いを生じているものと考えられる。この性による違いこそが思春期の身体的成長を契機に明確になってくるものであり、衝動といった生物の原初的レベルから人間の生き方を捉えようとする Szondi Test では、他の査定法には捉えにくいものが明らかになるのではないかと期待される。

さて Szondi Test の全ての8つの因子 (h, s, e, hy, k, p, d, m) の反応出現について男女別で集計して、有意差検定を行ってみた。その結果が表9である。男65名(平均年齢12.29歳)と女

59名（平均年齢12.39歳）の出現頻度の差について χ^2 検定を行っている。

表9 各因子の反応別・男女別出現頻度差検定

因子反応		男子 65 名 (実数)	女子 59 名 (実数)	差の検定 χ^2	有意差の 結果状態
h 因子	+	40	30	-	
	-	11	5	-	
	0	10	19	*	男<女
	±	4	5	-	
s 因子	+	5	4	-	
	-	41	43	-	
	0	4	2	-	
	±	15	10	-	
e 因子	+	16	10	-	
	-	19	25	-	
	0	19	13	-	
	±	11	11	-	
hy 因子	+	11	20	*	男<女
	-	16	21	-	
	0	28	14	*	男>女
	±	10	4	-	
k 因子	+	4	6	-	
	-	34	30	-	
	0	17	7	*	男>女
	±	10	16	-	
p 因子	+	42	33	-	
	-	7	9	-	
	0	9	17	*	男<女
	±	7	0	*	男>女
d 因子	+	12	20	*	男<女
	-	14	8	-	
	0	36	29	-	
	±	3	2	-	
m 因子	+	29	33	-	
	-	14	11	-	
	0	12	5	-	
	±	10	10	-	

* χ^2 検定 5%水準有意 - 有意差なし

結果の考察

調査結果によれば、まず h0 反応で女子中学生に多く出現することが統計的に認められている ($\chi^2 = 4.8826$ $p < 0.5$ $df=1$)。h0 反応はエロスの欲求が充足しており、情愛欲求が満たされていることを意味して、こうした傾向が男子よりも女子に欲求充足状態が生じやすいことを示している。

また hy 因子では、hy + 反応が女子に多く出現しやすいこと ($\chi^2 = 4.7531$ $p < 0.5$ $df=1$) が示されている。これは男子よりも女子の方が、自己の感情表出や顕示的行動に出やすいことを意味している。つまり女子は男子よりも、自己顕示的行動が出現しやすいのである。また hy0 反応は、幼稚で粗雑な感情表出が出現しやすいことを意味しているが、これは女子よりも男子に多くみられる ($\chi^2 = 5.1689$ $P < .5$ $df=1$) ことを示している。

また k 因子では、k0 反応が男子に有意に多く出現する ($\chi^2 = 4.0581$ $p < .5$ $df=1$) 結果となっている。この反応は、自我の意識レベルが多少低下していたり、また自己中心的な傾向になっていることを示しており、こうした傾向が女子より男子中学生に多いことを意味している。

p 因子では、p0 反応が女子に多く出現 ($\chi^2 = 4.1810$ $p < 0.5$ $df=1$) しており、この反応は自我の精神的要素の欲求充足を反映して、主体性が低下しやすい要素を示すが、こうした傾向が男子よりも女子に多いということの意味している。

また p ± 反応が女子には皆無で、男子に多く出現している ($\chi^2 = 4.8639$ $p < 0.5$ $df=1$) が、対人関係での孤独になりやすい状況を反映し、周囲から見放されているといった孤立する不安や、その結果、繊細な気持ちになったり尊大な心情に駆られたりといった複雑な気持ちのゆれが生じていることを示し、これが女子よりも男子中学生に多く出現している。

d 因子では、d + 反応が男子よりも女子に多く出現 ($\chi^2 = 3.8491$ $p < 0.5$ $df=1$) している。これは、新たな探求欲求、つまり移り気な好奇心であったり、新しい流行への関心が強いことを意味している。また気分の低迷状況や不機嫌さ、抑うつ感であったりするが、こうした傾向が男子より女子中学生に多く出現することを示している。

こうした性差による Szondi Test 反応を要約すると、「女子中学生は男子よりも、情愛欲求が満たされており、顕示的で、幼稚さを伴った自己顕示的行動をとり易く、精神的充足感もあるが、主体性は乏しい。そして移り気で新たな流行を求めて積極的に行動する要素が目立っている」といえる。

一方「男子中学生は、情愛欲求が満たされにくく、不満があっても顕示的な行動は控え目である。また自己中心的であり、対人関係では孤立しやすく不安に駆られて気分的に葛藤しやすい面があり、気分転換が女子よりも図りにくい面がある」ことを示している。

研究 3 一般中学生と非行少年の比較調査

1 比較調査をした対象

既述したような衝動傾向を中学生が持っているとするれば、同年代の非行少年との違いは、どこにあるのかというのが次の問題として生じてくる。これまでの研究結果から非行少年の反応には、以前と比較して多少、Szondi Test 反応にも変化が見られるようになっている。こうした状況を踏まえて、過去 10 年以内の比較的新しい時期の非行少年の Szondi Test 反応を対象群として、今回調査の非行のない一般中学生との比較をし、その違いを基に一般中学生の衝動傾向を明らかにしようと試みた。非行群については、中学生の 12～13 歳のデータが得られなかったため、出来るだけ近い年齢の者を調査対象にした。いずれも少年院収容の男子少年（以下、非行男子と呼ぶ）88 名である。なお年齢分布は、中学生男子（以下、中学男子と呼ぶ）は表 10 に、非行男子は表 11 に示したとおりである。表 11 に明らかのように非行男子の平均年齢は中学男子と比較すると平均で 2 歳程度若干上回っている。

表 10 中学男子の年齢分布

年齢	人数
12	46
13	19
合計	65

平均 12.29 歳

表 11 非行男子の年齢分布

年齢	人数
14	7
15	31
16	50
合計	88

平均 15.49 歳

2 因子反応の出現頻度の比較

各因子の反応の出現頻度を比較調査した結果を表 13 にまとめた。これによると k 因子には特異な有意差は出現しなかったが、その他の因子では 10% 水準の差の傾向を含めて、それぞれ有意差が出現している。± 反応や 0 反応の有意差の出現は少なく、他の反応（+ や - 反応で）の有意な差が多く出現している。

表 13 中学生と非行少年の因子反応出現の検討

因子反応		中学男子 65名	非行男子 88名	差の検定 χ^2	有意差の 結果状態
h 因子	+	40	56	-	
	-	11	7	Δ	中学群>非行群
	0	10	12	-	
	\pm	4	13	-	
s 因子	+	5	16	* Y	中学群<非行群
	-	41	43	Δ	中学群>非行群
	0	4	12	-	
	\pm	15	17	-	
e 因子	+	16	9	*	中学群>非行群
	-	19	48	**	中学群<非行群
	0	19	19	-	
	\pm	11	12	-	
hy 因子	+	11	10	-	
	-	16	44	**	中学群<非行群
	0	28	25	Δ	中学群>非行群
	\pm	10	9	-	
k 因子	+	4	7	-	
	-	34	53	-	
	0	17	17	-	
	\pm	10	11	-	
p 因子	+	42	48	-	
	-	7	12	-	
	0	9	23	Δ	中学群<非行群
	\pm	7	5	-	
d 因子	+	12	11	-	
	-	14	35	*	中学群>非行群
	0	36	38	-	
	\pm	3	4	-	
m 因子	+	29	60	**	中学群<非行群
	-	14	5	** Y	中学群>非行群
	0	12	13	-	
	\pm	10	10	-	

χ^2 検定： Δ 10% 傾向 * 5%水準 ** 1%水準 Y イエーツ修正 - 有意差なし

結果の考察

h 因子では、h - 反応が中学男子に多く出やすい差の傾向（10%水準）を示している。h - 反応は、受動性・女性性を意味しており、知性化傾向意味する反応である。これが非行群よりも中学生群に多く出やすい傾向を示している。

次にs 因子では、s + 反応が非行男子に多く出ている（有意差）。s + 反応は、積極性でもあり、男性性・攻撃性を意味している。こうした衝動が中学生群より多いという結果を示している。また逆にs - 反応では、中学生群に多く出現する傾向（10%水準）が認められている。s - 反応は、s + 反応の逆で、攻撃性の抑圧や受動的態度を意味する反応である。つまり中学

生群は、非行群に較べると、大人しい衝動を示すことが多いことを意味しており、現実的には妥当な結果となっている。

e 因子では、e + 反応が中学生群に多く（5%水準）出現しており、逆に e - 反応が非行群に多発（1%水準有意）している。e 因子は、倫理的要素を担う因子である。そして e + 反応は倫理的態度を意味しており、善良さ・謙虚さを象徴している。この反応が中学生群には非行群より多く出現していて、一方、e - 反応つまり反倫理的態度、邪悪さを意味する反応が非行群に中学生群よりも多く出ているのは、現実的にも意味的に合致するものである。

また hy 因子では、hy - 反応が非行群に多く（1%水準）出現している。hy - 反応は、自己隠蔽的態度をとることで反道徳的な要素を隠そうとする構えを意味しており、こうした構えが中学生群よりも非行群に多いということが明らかになっている。一方、hy0 反応が中学生群に多い傾向（10%水準）が得られている。hy0 反応は自己を隠さずしており、感情が直接的に表出されていて、感情衝動が減少していることを示す反応型である。つまり感情的になりやすい意味している。今回の結果から、中学生群は非行群に比較して、感情を抑制せず、感情的になりやすいことを示唆している。

次に p 因子では、p0 反応が非行群に多く出現する傾向（10%水準）が得られている。p0 反応は、自己充実感が満ちており、満たされているが故に現在は、自我衝動のエネルギーは減少、つまり精神的疲労感が生じることを意味するのがこの p0 反応型である。こうした状況が中学生群よりも非行群に多い傾向があることを示している。

次に d 因子では、d - 反応が非行群に多い（5%水準）結果となっている。この d - 反応型の意味するところは、新たな探求行動を停止し、既に獲得しているものに執着し固執する、柔軟性を失った融通のない態度を意味しているが、こうした要素が中学生群より非行群に多く出やすい状況にあることを示している。

m 因子では、m + 反応が非行群に多く出現（1%水準）しているのも、既述の d - 反応が非行群に多いことと同様な意味を持っているものである。つまり m + 反応は、既に獲得した対象に依存し甘えるという意味を持っている。こうした反応が中学生群よりも非行群に多いという結果を示している。また m - 反応型では、m + 反応の逆の結果となっている。つまり m - 反応は中学生群に多い（1%水準）結果となっている。これは古い対象から離反し、自立を志向する衝動である。また現実からの逃避を意味するものでもある。こうした衝動が非行群よりも中学生群に多いという結果が得られている。

こうした結果から中学男子の衝動傾向をまとめると、次のようなことが言える。

- ①大人しく、消極的であり、どちらかと言えば女性的な要素がある。
- ②真面目で、善良さがあり、謙虚な態度を持っている。
- ③感情表出は率直で、素直であるが、感情的になりやすい。

④自立・離反への志向があり、現実からの逃避的衝動がある。

つまり中学生の男子は、「大人しく消極的であり、真面目で謙虚・善良傾向があるが、感情的になりやすい面があり、母親からの離反志向があり、現実からの逃避傾向もみられる」といったことがいえる。

一方、比較的年少の非行男子は、

- ①積極的であり、男性的で、攻撃的態度も持っている。
- ②怒りや憎悪といった感情を持っており、反社会的態度を示しやすい。
- ③こうした態度や感情は、できるだけ抑制しようとしている。
- ④自己満足感はあるが、精神的疲労が出やすい。
- ⑤物事に拘りやすく、柔軟性に欠け、固執しやすい。
- ⑥甘えっ子で依存的な態度がある。

つまり非行男子は、「攻撃的で反社会的態度を持っているが、抑制的になろうとしている面もあり、自己中心的で柔軟性に乏しい。また依存的であるが、自分の意思が通らないと意欲が低下しやすい」といったことが言える。また中学生男子と比較すると、中学生男子少年は、「感情がそのまま表出されやすく短気であるが、大人しく真面目。周囲から離反的で逃避傾向がみられる」、一方非行男子少年は、「積極的であるが、反社会的で攻撃的な面もある。自己中心的であり、思いとおりにならないと、やる気を失くしやすい」といった違いが認められる。

これらはいずれもそれぞれの少年が持っている特徴に合致した傾向と考えられる。

思春期の衝動傾向について、上記のように中学生の男女の比較、中学生男子と非行少年男子の比較を各因子反応で調査した。更には発達障害児童と中学生の比較や被虐待児童との比較検討などの調査も考えられるが、今後の課題としたい。

[引用文献]

- 1) 中島義明編『心理学辞典』有斐閣 2005
- 2) M. W.Webb「The Szondi Test As a Group Technic」THE SZONDI TEST in Diagnosis Prognosis and Treatment 1959,89-94
- 3) 奥野哲也「ソンディ・テストの集団法について」犯罪心理学研究第21巻1984特別号28-29
- 4) 奥野哲也・花田百造「ソンディ・テストの集団法について(2)」犯罪心理学研究第24巻1986特別号6-7

[参考文献]

- 奥野哲也「Szondi Testの簡便の利用に関する研究(上)」佛教大学教育学部論集第20号2009,43-58
奥野哲也「Szondi Testの簡便の利用に関する研究(下)」佛教大学教育学部論集第21号2010,107-123
奥野哲也「被虐待児童の衝動分析と治療的対応について(上)」佛教大学教育学部論集第18号2007,107-122

思春期の衝動分析（奥野哲也）

奥野哲也「被虐待児童の衝動分析と治療的対応について(下)」佛教大学教育学部論集第 19 号 2008, 125-133

奥野哲也「ソンディ・テスト」金剛出版社『必携 臨床心理アセスメント』2008

奥野哲也「ソンディ・テスト」創元社『心理査定実践ハンドブック』2006

奥野哲也監修『ソンディ・テスト入門』ナカニシヤ出版 2004

大塚義孝『衝動病理学－増補』誠信書房 1993

Szondi.L (1947)『Lehrbuch Der Experimentellen Triebdiagnostik Textband』Hans Huber

(佐竹隆三訳(1964)『ソンディ・テスト 実験衝動診断法』日本出版貿易)

〔付記〕

本研究は、平成 20 年度佛教大学特別助成による研究成果であることを付記して謝辞とする。

(おくの てつや 臨床心理学科)

2010 年 9 月 27 日受理